

第二次 入学試験 問題

国語

函館ラ・サール中学校

2020. 2. 3

〔問題一〕次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「自分自身の場合、親や友だちとの連絡、動画鑑賞、ゲームアプリ等の娯楽が不可欠な役割です。(中略) SNSは友だちでも知人でも知人ではない人でも誰とでもネットを通してつながることができません。僕はちなみにスマホを使って四年目なんです。使い始めの頃はという『絶対、LINEは業務連絡しかしないよ』なんて親や友だちに言っていました。それから四年たち、気づけば僕にとつてLINEは友だちとつながるゼツコウのアプリと化しました。↓情けない！(中略)つまり僕の心の中に誰かといつもつながっていたい、孤独な状態はいやだ！ひとりはいやだというような感情・考えが不可欠なものにしてしまったから、SNSが使えるスマホがあたりまえのものになったのだと僕は思います」

私は、大学の講義でスマホ依存について話すことが多いのですが、ある男子学生は講義内容をうけて、レポートにこう書いていました。彼にとつて、スマホは「あたりまえ」のものであり、LINEなどのソーシャルネットワークサービス(SNS)を使つて、つねに親しい人や知人、知人ではない人につながるための重要なメディアなのです。

ゲームや動画鑑賞は、時間つぶしか暇つぶし、趣味の時間のエンチャウ線上でスマホとつきあっていると考えることができるとでしょう。しかし、SNSを使つて誰かとつながっていないと「孤独」であり、「孤独」はいやだ、という感情をもたざるをえなくなつたというのは、まさに① スマホが彼にもたらした固有の新たな「生の状態」だと思ふのです。

1 LINEは確かに「業務連絡」するには、便利なツールです。ある集まりのなかでの情報伝達、情報共有を効率よく達成できると私も思います。「業務連絡」のツールであつたはずが、彼のなかで、いつしか、LINEは親しい人、知人、**a** の他人とつながるためのツールへと変貌していったようです。もつと言え、つながるためではなく、「つながっていること」自体を確かめるためだけの、「つながっていたい」という意思や感情を確かめるだけのツールへと変貌していったのでしよう。

誰かとながつていたいと思ひLINEを使うとき、私たちはどのような話を相手にしているのでしょうか。別に大した話ではない、ただの雑談だし、いちいち覚えているほどの内容ではない、という返事が聞こえてきそうです。そんな長い文章は書かないし、面白いスタンプがいっぱいあるし、スタンプをうまく使えば、相手にいちいち言葉を使わなくても、自分の気持ちは伝わるし。こんな返事も聞こえてきそうです。話の中身じゃないよ、LINEでやりとりすること自体が面白いし、意味あるこ

となんだ。こんな返事も聞こえてきそうです。いろいろな返事の可能性を考えていると、私のなかで「井戸端会議」という言葉が浮かんできました。

「井戸端会議」とは何でしょう。近所に住んでいる奥さんたちが、井戸端に集まって、皿を洗ったり、野菜を洗ったり、洗濯したりしながら、雑談し、談笑する。そこにいない人の悪口や噂で盛り上がったたり、そうかと思えば、普段の暮らしの厳しさをしんどさを愚痴る、その意味で重い雑談になったりする。いずれにしてもまさに親しい人や知人が集まり、つながる場であり、語り合うという実践でした。

「でした」と私は過去形で語っていますが、まさに過去の情景と言えるでしょう。なぜなら私たちの日常生活で、井戸はあたりまえのものではないのです。でも私が子どもの頃であった昭和の時代までは生活の場に「井戸」は存在しました。炊事や洗濯など生活に必要な水を得るために、近所の人々は「井戸」を共有し、「井戸」を活用しました。当然のごとく、そこには人々が集まることになり、語り合いが生まれたのです。

c、相手と他愛もない話をしたり雑談しているという点でLINEでのやりとりと「井戸端会議」は、同じでしょうか。私は大きく二つの点でこれらは異なっていると思います。

一つは、直接対面してやり取りしているか C 否かという点です。「井戸端」はまさに、近所の人たちが集まってくる場所で、人々はお互いの様子や表情を確認しながら雑談します。このとき、相手の様子を見て、表情を見て、何を感じ、考えているのかを推し量りながら、楽しい話で盛り上がったります。まさに直接的で対面的なコミュニケーションの醍醐味や面白さが実感できるでしょう。

今一つは、そこで実際に暮らしている人々から決して切り離すことができない日常的な D 営みであるか否かという点です。先に述べたように「井戸」は暮らしに絶対欠かすことができない「水」を得ることができると重要な場所です。そして近所の人々は「水」を得るために「水」を使うために「井戸」に集まり、そこで「会議」が始まってしまふのです。すなわち「井戸端会議」とは、人々の暮らしから遊離した、どこか遠い空間で起こる営みではなく、常に人々の暮らしに根ざし、人々の生活臭や生活実感が充満した日常で起こる営みと言えます。もちろん近所の人と雑談したくて人々が「井戸端」に集まってくるからこそ「会議」が成り立っているのかもしれない。ただ、そこが暮らしに根ざした「井戸端」という象徴的な場所であり、直

接的な対面のコミュニケーションが基本だという点でLINEでのやりとりとは異質だと思うのです。

2 問題はやはり先の男子学生がわかっているように、LINEというツールが他者との「つながり」それ自体を確認するために使われていることであり、ツールに自分自身が囚われLINEでの「確認」に依存しないと他者との「つながり」を実感できなくなっている身体になっていることであり、また他者とどこかで「つながっていない」こと自体が「孤独」だと思ひ込んでしまっている姿なのです。

男子学生に私はこうたずねてみたいと思います。いつも何らかの形で他者と「つながって」いないと、本当に「孤独」なのでしょうか。LINEでやりとりすることでああなたは本当に他者と「つながっている」と実感し安心しているのでしょうか。SNSを通じた他者との「つながり」はあなたに「孤独」ではないどんな心の状態をもたらしているのでしょうか。そもそもあなたがイメージしている「孤独」とは、どのようなことをいい、他者との「つながり」とはどのような関係性のことをいうのでしょうか、等々。とりあえずこのあたりでやめておきますが、もつといろいろな形で問いかけることができるでしょう。

こうした問いに対して、私たちは、どのように考えていけばいいのでしょうか。はつきりしていることがあります。LINEにせよ、ツイッターにせよ、インスタグラムにせよ、ましてやスマホにせよ、それらは、あくまで便利な情報発信、情報収集、情報流通の技術であり道具にすぎないということです。こうした技術や道具に意志はありません。LINEが意志をもち、自分をないがしろに使った人間たちを「孤独」にしてやろうと考えれば、それはそれでなかなか怖いことだと思ひます。

問題は、やはりこうした道具を私たちがいかに使いこなすかであり、使いこなしの背後にある他者理解、他者とのコミュニケーションをどう考えるのかということなのです。

3 私はこう思います。親しい人たちといつでもどこでも簡単に「つながる」ことができるのは、無条件に喜ぶべきことであり、私が生きていくうえで楽しいことなのだろうか。他者をどのように理解し、他者とのように「コウシン」できるのかという問題を考える営みは、まさに社会学の中心を構成します。そして、シンメルが喝破しているように、他者という問題を考える核心は、人間のあいだにある「関係性」であり「距離」なのです。

そして、さらに私がつけ加えたいのは、他者とコウシンし他者を理解しようとするときに、どうしてもかかかってしまう「時間」であり「速度」なのです。インターネットで情報検索するとき、速ければ速いほど、便利だし、私たちはすごいなと思

います。しかし他者とコミュニケーションしたり他者を理解しようとするとき、それにかかる速度や時間は、同じように速ければ速いほどいいのでしょうか。

他者と真に「つながりたい」。これは誰しもがもつ願いだと思えます。この願いをかなえたいとき、私たちは、相手のことを慎重に時間をかけて考え、相手が何を感じ考えているのかをゆつくりと見詰め、想像し、相手の心や世界に至ろうとするのではないのでしょうか。いわば情報検索のように他者と「さくさく」とつながることはできないのです。仮に「さくさく」とつながっていると自分が感じているとしても、その実感の身をいま一度、見直す必要があるのではないかと思うのです。

他者と真に「つながりたい」という願い。それをかなえるためにも、こうした他者と自分とのあいだにある「距離」や「時間」を考えるべきだし、^③他者理解のための「速度」を考えるべきです。そのうえで私たちがいかに他者と簡単には「つながれない」のかをじっくりと考える必要があるのです。

4 LINEで相手との短い言葉やスタンプのやりとりをいくら楽しめているとしても、そのことだけで他者と「つながりたい」という願いはかなえられないのです。

(好井裕明『「今、ここ」から考える社会学』より)

(一) 〓 線部A～Eについて、カタカナは漢字に改め、漢字は読み方をひらがなで答えなさい。

(二) a に入れるのに最も適当な言葉を考え、漢字一字で答えなさい。

(三) b、c に入れる言葉として最も適当なものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、

同じ記号をくりかえし用いてはいけません。

ア つまり イ と ころ で ウ た だ し エ も は や オ ま さ か カ ま た

(四) 〓 線部①「スマホが彼にもたらした固有の新たな『生の状態』とありますが、これはどのようなことですか。その説

明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア SNSでの「つながり」を今まで感じていなかったが、しだいに「つながり」を感じるようになり、いつのまにか新たに自分の世界が広がったと感じられるようになったということ。

イ SNS上の話題はたいしたことのないものだとか軽んじていたが、SNSでの「つながり」を経て、今ではSNSで提供される話題がとても大切なものと考えられるようになってしまったということ。

ウ 自分が連絡をとる時だけにSNSを使用していたが、SNSで「つながる」ことに頼りすぎてしまったことで、SNSを用いること以外では他の人と連絡ができなくなってしまったということ。

エ 当初は業務連絡に限ってSNSを使用していたが、人々と「つながる」手段としても使うようになったことで、SNSで「つながり」を確かめないと不安で仕方がなくなってしまったということ。

(五) ——— 線部② 「井戸端いどばた会議」とありますが、筆者の考えている「井戸端会議」の説明として最も適当な表現を、これより後の本文中から三十字でさがし、最初と最後の五字をぬき出しなさい。ただし、句読点や記号も字数にふくめます。以下の問題も同様です。

(六) ——— 線部③ 「他者理解のための『速度』を考えなければなりません」とありますが、ここから読み取れる筆者の考えとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 他者を理解して「つながる」ためには、情報を得ることが目的である情報検索とは異なり、その情報をもとに相手と関わることを重視すべきだという考え。

イ 他者を理解して「つながる」ためには、情報を得たらそれで終わりとなる情報検索とは異なり、その後どうするのかを考えるための時間を考慮すべきだという考え。

ウ 他者を理解して「つながる」ためには、お互いに理解し合えるように、自分の情報も相手に提供することが近道だという考え。

エ 他者を理解して「つながる」ためには、速いことが最優先される情報検索とは異なり、十分に時間をかけることも大切だという考え。

- (七) 次の一文は、ある形式段落の最初にあつたものです。これは、本文中の ～ のどこに入りますか。最も適当なものを一つ選び、数字で答えなさい。

このように書いてきて、私は別にLINEでのやりとりがだめだと言いたいものではありません。

- (八) 〰〰〰線部「LINEでのやりとりは異質」とありますが、井戸端会議はLINEと比べてどのような点で異なっているのですか。本文中の表現を用いて六十字以内で説明しなさい。

〔問題二〕 次の各問いに答えなさい。

- (一) 次の①～⑤の に適当な漢字二字を入れ、四字熟語を完成させなさい。

① 同音 ② 万別 ③ 小異 ④ 千秋 ⑤ 絶命

- (二) 次の①～③の — 線部について、かなづかいが正しければ○を記入し、正しくないものは正しい形に書き改めなさい。

- ① こずかいをためて、ほしい物を買う。
② 洗濯したらセーターがちぢんでしまった。

③ 君の言うとうりだと思う。

(三) 例にならない、次の①～③の [] に入る、() 内の意味を持つカタカナの語を答えなさい。

【例】白と黒の [] が明確なデザインだ。(対照・対比) ↓ 答え：コントラスト

- ① お客さまからの [] には店長が対応します。(苦情・文句)
- ② 君の宿題を手伝うことでよくにどのような [] があるというのだ。(長所・利点)
- ③ 通訳としての [] を順調に積み重ねていく。(経歴・経験)

(四) 次の①、②については似た意味のことわざを、③、④については反対の意味を持つことわざを、それぞれ後から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号をくり返し用いてはいけません。

- ① のれんに腕押し
- ② うりのつるになすびはならぬ
- ③ 下手の横好き
- ④ 先んずれば人を制す

- | | | | | | | | |
|---|-----------------------------|---|----------------------------|---|----------------------------------|---|--|
| ア | 猫 <small>ねこ</small> に小判 | イ | 下手の道具調べ | ウ | 好きこそものの上 <small>じょうず</small> 手なれ | エ | 急 <small>せ</small> いてはことをし損 <small>そん</small> じる |
| オ | 豆腐 <small>とうふ</small> にかすがい | カ | とびが鷹 <small>たか</small> を生む | キ | 蛙 <small>かえる</small> の子は蛙 | ク | キジも鳴かざば撃 <small>う</small> たれまい |

〔問題三〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

真人は父親の転勤にともなって、オーストラリアで生活しています。父は会社を辞め、オーストラリアに永住することを決めましたが、母は帰国して、日本の高校に通っているつかさと暮らすことにしました。

次の朝、ぼくらは暗いうちに起き出した。出がけにお母さんはチロのお墓に手を a ていた。チロにはまあくんがいたものね、つてそばにいたぼくを見上げる。家の中は静かで、玄関先にお母さんのスーツケースがあつた。お母さんはほかに持つて帰る物はないつて言つてた。東京からここに来るときはものすごい荷物だったのに、いまは引越しの段ボール箱もお父さんとぼくで片づけて、すつきりしている。この家にぼくらが来て、二年近くが経とうとしている。

お父さんがお母さんのスーツケースを玄関先から、車の停めてあるドライブウェイに転がしていく。灰色の背中をしたマガパイの雛が親の黒と白の翼に隠れるようにして、庭先でミミズをつついていた。前庭はお父さんが休みの日になると芝生を刈るので、緑色のカーペットみたいにみえるけれど、このところ雨がぜんぜん降らないので端のほうから茶色く枯れてきた。この夏は、去年の夏に比べて節水レベルが厳しい。この日のヨホウは三十八度。クリスマスが近いつてことだ。お母さんは半袖のワンピースを着て、手にはバッグとダウンジャケットを持つている。ものすごく b な感じ。ダウンジャケットは、成田に着いたらずぐ上着を着ないとかぜをひくぞ、つてお父さんがスーツケースからわざわざ取り出してお母さんに手渡していた。

ドライブウェイ沿いに隣の家との目隠しにするために、このあいだお父さんが生け垣をつくった。生け垣は、ノアのお父さんのお店で苗を買つて、ノアのお父さんに手伝つてもらつて植えたけれど、まだぼくの膝の高さしかない。ドライブウェイの車庫のそばに大きな穴があいている。ノアのお父さんは枯れかかった椿を見つけて、裏庭に植え替えてくれた。この椿は、九メートル近くになる、こんなドライブウェイ沿いよりもっと広いところでないか、と言つていた。ノアに手伝わせて土をやわらかくする薬と B ヒリヨウも撒いてくれた。裏庭の北の C カド、チロのお墓のすぐそばだ。大家さんにチロのお墓を見せたけど、ぜんぜん怒らなかつたのでぼくは安心した。

空港につくまで、ぼくは話さなかった。運転席と助手席では、小声でお父さんとお母さんがなにか喋ってたけれど、ケンカになりそうにないのでほっとした。「つかさ」「真人」って何回か聞こえた。「東京」「こっち」っていうのも聞こえた。夏の朝日は、ぼくらと同じくらい早起きで、車の窓ごしでも強烈な光でぼくらを刺した。

空港に着いて、お母さんがチェックインを済ませるとお父さんがコーヒーでも飲もう、って飛行機の見えるカフェに入った。ケンカしてないのに、お父さんとお母さんはケンカしているみたいに黙りこくったままだった。ものすごく気まずい。ぼくはコーラを飲みながらその場で思いついたこと、つまりこの夏の計画をベラベラとひとりで喋った。コーラは砂糖が多すぎるっていつもお母さんは文句を言うのに、今日はだまつている。＊ワトソンの夏期講習にジエイクと通う。ケルヴィンの家に泊まりに行く。ノアのポニーにまた乗せてもらおう。サツカーの合宿。メイソンとリアムにも久しぶりに会える。

「お友だち、たぐさんいるんだ、真人」

お母さんがコーヒーカップを受け皿に置いた。うん、ってぼくは答える。もう、お母さんよりお友だちのほうがいい歳よね、ってふっと笑う。ぼくをみながら目を細めた。目尻に細かい皺がいっぱい寄った。こんど七月が来たら十四歳だな、ってお父さん。

「そうよね、ほんとうに、そうなのよね。こっちは、急いで大人にならなくっちゃいけないみたいね」

お母さんは、夕方にはもう東京、地球は狭いわね、って立ち上がった。お父さんもつられたように立ち上がりながら、ちよっと笑った。

「そうとも。地球は狭い。でも、世界はやっぱり広いもんさ」

天井から床まである銀色の自動ドアのまえでぼくらは立ち止まる。ドアの両脇にはフライトの目的地、出発時刻や到着時刻の表示された電光表示板が並んでいる。そこにいる人たちはだれもかれも、劇の登場人物みたいだった。自分と相手とこの場所だけに全神経を集中させている。お客さんはいない。息子らしい男の人を笑顔で見送った女の人が、ドアが閉まってから、涙をぼろぼろこぼしはじめた。だんなさんらしい男の人に背中を優しくさすられながら、退場。大家族がドアをくぐ

る。たったひとり残された若い女の人は、ドアが閉まってからも手を振るのをやめない。お母さんがくるりと振り返った。

「じゃ、まあくん。お父さんとふたりでしつかりね。新しい学校も、がんばってね」

うん、って① ぼくはなるべくふつうに答える。

「あなた。真人のこと、よろしく願います」

お母さんはお父さんに頭を下げた。お父さんも、つかさのこと、三鷹みたかの家のこと、よろしく頼むたの、って頭を下げる。

「まあくん。冷蔵庫に、グラタンのもとを作っておいたから、オーブンで焼いて食べてね。冷凍室れいとうしつにも、レンジでチンするだけで食べられるものがたくさん作ってあるから。牛乳は腐くさらないうちに飲んでね。あなた、洗濯機せんたくきの調子が悪いの、知ってた？

どうせ帰るって思っ、中古を買ったのがいけなかったのよね、この際、新しく買い換かえてもいいんじゃない？ 節水レベルが厳しいから、値段が高くて節水タイプのドラム式。サッカーのユニフォームも洗わなくっちゃいけないでしょ。すごい汚よごし方するんだもの、まあくんは」

最後まで、いろいろ細かいなつて思っただけど、うるさいとは思わなかった。それどころか、② このお小言をもう少し聞いていたかった。なんでぼくらは、バラバラに分かれて暮らすことになったんだろう？ ぼくたち、このあいだまで、家族四人でご飯食べてたはずだ。みんながやりたいことをしようとしたら、こうするしかないのはわかってるんだけど。お父さんはこれから先もこっちに残って仕事をしたい。お母さんは日本に戻もどりたい。お姉ちゃんは最初から高校は日本って決めてたし、ぼくはワトソンに通いたいの、ここにすることに決めた。チロは、もういない。

「あなた」

お母さんがうつむく。片腕かたうでに提さげていたダウンジャケットが床にふわりと落ちた。私、これでよかったのかしら？あなたに言われたみたいに、なにも努力してこなかったんじゃないかしら？ この国の気に入らないところばかりが気になって、文句ばかり言っ。仕事もしてない、言葉もわからない、だれも私のことなんか相手にしてくれないって、ほんと、子供みたい。* 昨日だって、こっちの人、みんなあんなに優しい人たちなのに、私、うまくお礼も言えなかった。

「過ぎたことをどうの言っても、仕方ないさ」

お父さんが床に落ちたダウンジャケットを拾って、お母さんの肩かたにかける。

「でも、努力すればなんとかなったと思うの」

「努力と我慢がまんは違ちがう。きみの場合は、我慢になると思う。きみにはこれ以上我慢させたくない。もう、自分のことを後回しにしないでくれ」

お母さんの目に涙が浮かんで、まあくん、まあくん、とぼくを呼んだ。

「やっぱり、お母さん、この国が嫌い。この国にあなたを取られた」

ぼくはだまつてお母さんを見下ろす。③ ぼくは生まれて初めて、お母さんがかわいそうだと思った。ぼくのせいでこんなことになったのに、この国のせいになっている。

「まあくん、やっぱり、お母さんと日本に帰ろう。お母さん、今までみたいにガミガミ言わない。サッカーもすればいい。行きたい学校にも行けばいい。もう大きいんだし、ぜんぶ、あなたが決めればいい。だから、ね、ね」

お母さんは目も鼻も真っ赤にしている。お母さんのためだったら、* スシつてどなられたつていい、補習校に通ってもいい、漢字のテストだつてやっただつていい、サッカーだつてあきらめたつていい、通訳もやつてあげる、でも、これだけは、どうしてもだめなんだ……！

「やっぱりお母さん、日本でしか生きていけないの。ごめんね、まあくん」

お母さんはダウンジャケットの襟元えりもとを片手でつかむと、背中をむけてドアに向かった。

「遠子」

お父さんの声にお母さんが振り返る。その場で金縛りかなしばりにあったみたいにお母さんはじつと立ち止まった。そんなかなしい目、もうしないでよ。お母さん、おねがい。ぼくは、c 目を閉じた。

すると、とつぜん、ぼくの耳元で、* 聞き覚えのある音が聞こえてきた。しやらしやらとピンの雨が降る音。まぶたの裏で、④ 生き返つた蝶たちが虹色の帯となつて飛び立つ。おそろおそろ目を開けると、銀色のドアのすきまから、赤いジャケットの羽がふわりとひるがえるのが見えた。その赤色はぼくの目を焼いて、あたり一面紅葉が散つた。聞こえる。命がけでさような

らを叫ぶ声。ぼくは、しばらく耳をふさいでいなければならなかった。冷たい金属のドアが閉まって、白金の幕が容赦なく流れ落ちた。

「帰ろうか」

お父さんがぼくの肩を抱いて、ぼくらは歩き始めた。

(岩城けい『Masato』より)

*ワトソン：優秀な生徒の集まる現地の中学校。

*昨日：卒業式後のパーティーでお母さんはパンをふるまい、出席した人たちにほめられた。

*スシ：引越して間もないころ、現地の子からつけられたあだな。

*聞き覚えのある音が聞こえてきた：真人は以前、友だちの家で蝶の標本を見せてもらったときに、留めているピンが外れ、死んでいるはずの蝶がいつせいに飛んでいく空想にとらわれた。

(一) 〓 線部A～Cを漢字に改めなさい。

(二) に入れるのに最も適当な語をひらがな三字で答えなさい。

(三) 、 に入れるのに最も適当な言葉を、次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

…ヘア デタラメ イ おごそか ウ あけすけ エ チグハグ

…ヘア きつと イ ぎゅつと ウ ひゅつと エ かつと

(四) ——— 線部①「ぼくはなるべくふつうに答える」とありますが、この時の真人の気持ちとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア あれこれと言い出しそうなお母さんをできれば相手にしたくないという気持ち。

イ 周りの人たちの別れの悲しみにつられないようにしようという気持ち。

ウ 帰国するお母さんとの別れが大げさなものにならないようにしたいという気持ち。

エ お母さんのせいでめばえたこれからの生活への不安を打ち消したいという気持ち。

(五) ——— 線部②「このお小言をもう少し聞いていたかった」とありますが、この時の真人の気持ちとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 家族がバラバラになった理由が、お母さんの小言からわかるかもしれないと思っている。

イ お母さんの小言もあまり聞けなくなるのだと思うと、それさえも名残惜しく感じられている。

ウ お母さんの小言を聞くことも二度となくなると思い、悲しみがこみ上げてきている。

エ お父さんにまで小言を言い出したお母さんに驚き、この後どうなるのかとハラハラしている。

(六) ——— 線部③「ぼくは生まれて初めて、お母さんがかわいそうだと思った」とありますが、ここからうかがえることとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア お母さんの主張はただのやつあたりで、海外生活になじめなかった自分を棚に上げていただけだと思えるほど真人が精神的に成長したこと。

イ 精神的にも成長した真人は親元を離れて暮らしたいのに、それを受け入れられないお母さんをあわれに思っていること。
ウ がんばって友だちをたくさんつくったり勉強したりした真人が、お母さんの苦勞を理解できるほど精神的にも成長したこと。

エ 精神的に成長した真人が、いつまでも自分に頼ろうとするお母さんを見じめだと思うようになったこと。

(七) — 線部④ 「生き返った蝶たちが虹色にじいろの帯となって飛び立つ」とありますが、これはどのようなことをたとえているのですか。三十字以内で答えなさい。ただし、句読点も字数にふくめます。